

記念講演

「強く優しく生きる！～いわさきちひろの人生と平和～」

かな ともこ
講師：海南 友子さん（ドキュメンタリー映画監督）

2012年の夏に公開されたドキュメンタリー映画「いわさきちひろ～27歳の旅立ち～」を手掛けることになったきっかけや取材を通して見てきた『ちひろ』の強さ・優しさを監督ならではの視点からお話しいただきました。



山田洋次監督との出会い

あるお寿司屋さんで山田洋次ご夫妻と同席させていただいたことがあります。実は奥様が私を監督に紹介して下さいましたが、その時に「いわさきちひろを知ってる？」と聞かれたのです。もちろん絵は知っていましたが、ちひろが生きているかどうかさえ知りませんでした。当時、いわさきちひろ美術館の理事長であった山田監督はちひろの生き方に関心があり、誰かが映画を作ってくれないかと思っていたようで、「あなた、やる気ある？」と。

いわさきちひろについては子どもの頃に読んだ絵本の印象があったくらいですが、著作権の運動にも奔走したちひろの人生を面白そうだと直感しました。働く女性としても大先輩であり、何かヒントがあるかも、と企画したのです。



3年がかりのインタビューを経て

40年も前に亡くなった方を平面から立体化していくという作業は思ったよりも大変でした。3年かかって約50人にインタビューし、長野県からロケを始めました。取材の中で「ちひろは鉄の棒を真綿でくるんだような人」という言葉を聞きました。つまり、本人の意思以外では動かない確固たるものを持っている人だったようです。この言葉を聞いて改めてちひろの絵を見ると腑に落ちるところがありました。

運命の人とともに

親の勧めのままの結婚に失敗したちひろは、その後上京し、8歳年下の松本善明と出逢います。相手の親からは反対され、駆け落ち同然で結婚。4畳半の下宿生活で二人だけの結婚式を挙げ、本当に好きな人と結ばれる喜びを感じた頃です。当時、司法浪人の夫は収入が無く、妊娠していたちひろは新聞のカットなどを描いて生活を支えていました。出産後も子どもを育てながら働きました。

ちひろのように少しずつイバラを切り拓いてくれた女性たちがいたからこそ今があるのだと感じています。子どもを描くことが好きだったちひろは街で3人の姉妹にモデルになってもらったことがあるのですがその姉妹にこう語りかけています。「これから先の世の中は一人ひとりがこうなりたいと思ったことを叶えることができるのよ」と。

平和を愛して

1975年、ベトナム戦争の最中にちひろはこの世を去りました。「戦火のなかの子どもたち」という絵本が絶筆となりました。子どもの笑顔や絵を描くことのできる幸せを奪っていくのが戦争だと思っていたちひろは世界で戦争が起こるたびに手に取ってもらえる絵本を残したのです。

東日本大震災が起きて

この映画は2011年に公開予定でしたが、ご存じのように3月11日に震災が起きました。映画の公開は一年延期することとなりました。私の誕生日は福島第一原発の事故が起きた日と同じ3月16日です。現場から4キロのところまで取材に入りました。ちょうどその頃、妊娠していることに気づき、体内被曝を懸念して、やむなく取材を止めました。でも、このタイミングで子どもを持つことができたことに感謝しています。黙認することは認めるということ。知らず知らず加害者に加担していることもあります。映画の裏には「すべての人がすべての社会的なことに関わることができる」というテーマを込めました。ちひろは子どもを育てながら社会と闘った人。社会が変わるか変わらないかは一人ひとりの思いです。この作品を通して、なにか伝えることができたなら、そして、ちひろのように強さと優しさを持って小さくてもいいから一本のイバラを切り取りつつ道を拓きたいと思っています。

